

令和 2 年 5 月 24 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K03971

研究課題名(和文) 高齢生活困窮者の社会的つながりを高めるサポートモデルの開発

研究課題名(英文) Support Model of Social Tie for Old Vulnerable Men

研究代表者

岡本 菜穂子 (OKAMOTO, NAHOKO)

上智大学・総合人間科学部・准教授

研究者番号：30553565

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、路上生活等の経験がある高齢の生活困窮者を対象として2段階で調査を実施した。

第一段階の質的調査(面接調査)により、対象者たちは、社会的役割や家族との連帯を喪失し、他者との日常的な接触を失い、孤独に過ごしていた実態があった。しかしながら、信用できる支援者や知り合いからの誘いで集いの場に参加をすることにより、新たな社会的つながりを見出し、孤立から脱出を可能にしている者たちもいた。

第二段階のアンケート調査により、現在の住まいに住んでいる期間が長いほど、他者へ相談する場・接触する機会や、他者と交流を楽しめる場がある割合が高かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の生活困窮高齢男性たちの脆弱性：中高年層の単身男性が大半で、簡易宿泊所や一時保護所などで暮らす。家族や親族と接触することがほとんどなく、特定の密な関係を持つ者は少ない。家族、親族や友人のような強い紐帯は少なく、親密性が低い弱い紐帯は存在している。日本の生活困窮高齢男性たちの肯定的意味：伝統的な家族や親族とのつながりを持たずとも、地域社会に参加することで、居住区域で多くの他者と共有することにより、人生の満足度へ影響があると考えられる。一旦他者との接触を失ったとしても、安定した住まいと経済的な保障が基盤に整い、その上で他者と交流するきっかけを得て、社会とのつながりを再編することができる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we conducted a two-step survey of vulnerable people living in Japan.

According to the first phase of the qualitative survey (interview survey), the subjects had lost their social roles and solidarity with their families, had lost their daily contact with others, and had spent their time alone. Others, however, found new social connections and were able to escape isolation by participating in gatherings at the invitation of trusted supporters or acquaintances. According to the second phase of the questionnaire survey, the longer a person lived in their current residence, the more likely they were to have opportunities to consult with others, contact others, and enjoy interaction with others.

研究分野：公衆衛生

キーワード：社会的つながり 生活困窮 単身高齢者 路上生活防止

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

グローバル社会が進む中、貧困は国際的な解決課題の最優先課題である。2008年のリーマンショックの影響は、世界的に経済的な波紋は拡大し、多くの国で所得格差や貧困率の上昇が目立っている。日本では2013年11月の生活保護受給者数は過去最多の216万4,857人を記録し、国際比較においても日本の相対的貧困率が先進国第2位と、社会格差や貧困層の広がりが確認されている。

今日「ホームレス状態に置かれた人々の実情」について様々な現場からの報告が多数されている中、高齢者や障害を持つ人々は路上生活から一旦定住化を果たしたにも関わらず、社会的つながりの薄さゆえに見知らぬ土地でのアパート生活や生活再建が自己管理しづらくなり、再路上化に至る現状が明らかになってきた。これに呼応する政策で、「ホームレスの自立の支援等に関する基本方針」が打ち出され、ホームレスとなることを防止し、ホームレスが自らの意思で安定した生活を営めるように支援することに舵が取られた。しかし、その支援策を構築するにあたってのサポートモデルは、地域特性の相違から画一的なものではなく、各地域でサポート制度を設定する自治体や活動支援団体に任されている。特に、支援を受けるだけの生活困窮者ではなく自らの意図で解決をする当事者としての潜在能力を有効に活用し、自助・互助・共助を作り出せるかが鍵となっている。

社会的孤立の問題は、単に隣近所や家族との関係や社会組織とのつながりの有無として捉える「孤独」としてではなく、いかに社会から追い出されているかという「社会的排除」にあるかを議論することが必要である。「住まい」という物理的な場所があることに加え、安定した生活を営むためには人と人との「関係」、人と社会との「関係」、その人が社会における「位置」が包摂されていることがホームレス状態にあった人たちが定住化を継続していくために必要である。

### 2. 研究の目的

路上生活等の経験がある高齢生活困窮者を対象に、路上生活等の経験がある高齢生活困窮者が、どのような社会的つながりによって再定住化を果たしているのかを構造的に探ること、社会的なつながりに変化をもたらす要素を明らかにし、地域における安心した生活を支えるための社会的つながりを高めるサポートモデルを考察する。

### 3. 研究の方法

支援団体を通じてスノーボールサンプリングにより調査参加者を募った。調査者が研究対象者に文書を用いて説明を行い、7名のインタビュー及び131名から調査票への回答を得て、データを収集した。

### 4. 研究成果

7名のインタビューから得たデータより、高齢生活困窮者たちは、社会役割や家族との連帯を喪失し、他者との日常的な接触もなく、一人で孤独に過ごしている実態が浮かびあがった。一方で、孤独だった者が他者からの誘いをきっかけに集いの場へ参加することにより、自由に入出力できる場ができ、他者との交流が楽しめる活動の機会を得ていた。さらに、集いの場でつながった人との継続的なコミュニケーションや、信頼を寄せられる人を確保していた。彼らは何かしらのきっかけや他者からの紹介で集う場への出入りやプログラムへ参加することにより、新たな社会的つながりを見出し、孤立からの脱出を可能にしていた。本調査の参加者たちは、壮年期には地域との交流がなく、高齢になり社会保障を受けて地域で生活するようになっていた。そのような状況にある者たちも、交流の場へとつながるきっかけが外部から提供されることで、交流の場への参加機会を得る結果となっていた。また、本調査の参加者たちは、新たな社会的つながりにより、人との付き合い方が拡大し、社会における自分の役割の獲得していた。さらに、金銭以外の大切なものを発見し、自分の新しい面を発掘することができた。彼らは他者とのネットワークを通じて肯定的に自身の存在を認めることができていた。社会参加を通じて気心の知れた人との心のつながりを体験していたことから、家族や地域といった伝統的な社会的つながりから得る信頼感や安心感に特化しない、新しいつながりから得る信頼感や安心感とそれを支える新しいアイデンティティを本調査の結果から得ることができた。

131名の調査票から得たデータより、全対象者中、平均年齢 65.45 歳、40 歳以下 3 人 (2.4%)、40 歳代 9 人 (7.1%)、50 歳代 13 人 (10.2%)、60 歳代 56 人 (44.1%)、70 歳代 43 人 (33.9%)、80 歳代 3 人 (2.4%) と中高年層が大半である。婚姻状況については、配偶者のいない者が、92.1%と高い。現在の仕事は、仕事に従事している者は、48.8%であるが、就労形態はパートや日雇い等、非正規雇用である。無職の者は 51.2%である。現在の住まいは、簡易宿泊所 33.1%が最も多く、次いで一時保護施設 29.9%が順に多い。現在の主な収入源は、生活保護 45.7%が最も多く、次いで雇用の仕事による収入 28.3%であった。自由に参加できる場があると答えたものは 66.1%、誰かと密な関係がないと答えたものは、67.7%であった。継続的にコミュニケーションをとる相手がいると答えたものは、63.0%であった。他者と交流を楽しめる活動の場があると答えたものは 54.3%であった。現在の住まいに居住している期間の長さが長くなればなるほど、他者と接触する頻度の多さや、自由に出入りする場を持つ割合が多くなった。

これらの結果から、地域における安心した生活を支えるための社会的つながりを高めるサポートモデルには、その地域で住み始めて間もない人たちと、ある一定の期間以上その地域で住み続けている人とでは、社会的つながりを維持するサポートモデルが異なる可能性が考察された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 NAHOKO OKAMOTO, CHIEKO GREINER	4. 巻 6
2. 論文標題 Social Ties:Among Single Older Men	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 6th Academic International Conference on Social Sciences and Humanities AICSSH 2018	6. 最初と最後の頁 93-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Nahoko OKAMOTO, Chieko Greiner
2. 発表標題 Social Ties : Case Study by Single Old Vulnerable Men
3. 学会等名 The 6th Academic International Conference on Social Science and Humanities（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nahoko OKAMOTO, Chieko Greiner
2. 発表標題 IBASHO AND SOCIAL NETWORK FOR OLDER HOMELESSNESS
3. 学会等名 American Association for the Advancement of Science annual Meeting 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本菜穂子、グライナー千恵子
2. 発表標題 生活困窮単身高齢者の社会的紐帯の脆弱性
3. 学会等名 第33回日本国際保健医療学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nahoko Okamoto
2. 発表標題 Community Based Participatory Research(CBPR) with urban poverty and older Adults
3. 学会等名 Mixed Methods International Research Association (MMIRA) Conference 2016
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	グライナー 智恵子  (GRINER CHIEKO)  (20305270)	神戸大学・保健学研究科・教授     (14501)	